
第6回 福祉のまちづくりモデル地区推進部会 議事録

平成21年3月17日 9:30~11:30 大宮区役所 1階 多目的室

出席者(敬称略):三浦、河合、国島、佐々木、柴崎、平野、宮部、田口、山崎、久世、大宮小学校(浅田)、
桜木小学校(阿部)

関係団体職員:さいたま市社会福祉事業団 船戸 さいたま市社会福祉協議会 大橋

事務局:福祉総務課 並木、手塚

市関係課:大宮東口まちづくり事務所 三上

- 【次第】
- 1 開会
 - 2 議事等
 - 1) 大宮小学校における取り組み内容について
 - 2) 高砂、仲本小地区の検証について
 - 3) 桜木小学校での展開について
 - 3 閉会

【内容】

- 1 開会
- 2 議事等
 - 1) 大宮小学校における取り組み内容について
事務局 資料確認
資料1-1、1-2、1-3説明(省略)

三浦 私の感想としては、年度替わりということもあり、部会の立ち上がりが遅かったように思う。新しく委員になられた方も戸惑われたことと思うし、学校の想定していたカリキュラムにかなり影響を与えてしまったことについては、率直にお詫びしなければならない。苦労いただいて得た成果であり、これを活かしていきたい。

宮部 私自身はまちあるきに参加出来なかったが、育成会の会員の方が参加した。参加した会員は、子どもたちの新鮮な目に驚かされると同時に、とても勉強になったと言っていた。私の感想としては、部会として話し合いが持てなかったことは残念に思う。また、私たち育成会としては、知的障害のある子どもをもつ家族の団体として、大宮小学校のほうに障害のある子どもの教室があるというお話を前回の部会のときに聞いていたのに、知的障害のある子どもたちとのかかわりに取り組むことが出来なかったことが残念。また、これは単なるイベントではなく心の学習でもあると思うので、学校のほうでも振り返りの時間を十分にとっていただくことが大切であり、部会でもきちんと話し合いの時間をとっていただきたい。

佐々木 先生方のご苦労がにじみ出ていた発表会であったと思う。障害児がいらっしやるような雰囲気もあったけれども、それを引き伸ばしていらっしやると思った。私の問いかけに対する答えに困っていた生徒さんに対して、先生が生徒さんの気持ちをうまく聞き取り、うまく答えを引きだしてあげていた。私も初めて参加したが、多くの方が参観しておりよかったと思う。

河合 今回の件について、私はあまり期待を持っていなかった。小学校の総合学習の時間は短いため、その時間を通じて子どもたちが障害について理解出来るとは思っていなかった。大宮小学校の生徒の皆さんは非常によく勉強していた。大宮駅に行ったとき、タッチパネル式の券売機を見て「この券売機は目の見えない人は使えない。」切符を見て「切符には点字がついていない。」などと言っており、それにとっても驚いた。また、インフォメーションセンターの人に対して、「手話は出来ますか。」と聞いてみるなど、積極的な姿勢にも感心した。子どもたちから教え

てもらったことは、天井から吊り下げられた看板は、子どもたちの目に入りにくいということや、道幅の狭い道路では道路にはみ出した看板が目が見えない人にとって危ないということ。看板の位置等の問題についても考えるべきであったと思った。

ソフト面の問題については、障害者に触れ合う機会がないと分からない問題であり、ふれあいを広めるべき。

久世 大宮小学校の特徴は、特殊学級があること。小学校入学時から障害のある方とのかかわりがあり、子どもたちはまちであっても自分から話しかけるくらいの教育を一年生から受けている。それは素晴らしいことだと思う。

バリアフリーの問題については、大宮駅は東口が整備されてきれいになった。それに関して言うと、大宮区民会議が中心となり最終的にエレベーターの設置が実現する運びとなった。やっと大宮駅周辺のまちづくりも進みつつある。商店街の看板、自転車についても地元商店街の人にお願ひし、クリーン作戦という形で清掃をしながら、除去する方向で進んでいる。

山崎 子どもたちは昨年の春から学習を進めており、学校側にとっては、学校のカリキュラムとこちらとの調整がすごく大変であったと思う。桜木小学校においては、部会とのすりあわせを早期に行っていくほうがよい。私自身がまちあるきにも参加したが、最初は車いすを押すことさえ考えあぐねていた子どももいたが、障害のある方との体験を通じてやる気や気づきが出てきていた。

宮部委員もおっしゃっていたとおり、これが単なる一過性の体験として終わってしまうのではなく、これをいかに身につけていくか、自分の家庭に持ち帰り、親御さんに話してもらうことで、家庭の中で福祉のまちについて考えていただく機会が広がるのが一番だと思う。まち歩き当日も参加された保護者の方がいましたが、とても少なかったのもったいない。参加を通じて単なるイベントとして終わるのではなく、地域に根付くものとなってほしい。

柴崎 班編成が、少人数であることは非常に良かったが、障害者の方がいない班があったのは残念。障害者の方と歩くことでもっと気づくことが多かったのではないかと思う。私自身子どもたちから聞かれたことに適切に答えられているのか自信がない部分もあった。発表会には、多くの親御さんが参加されていたが、親子で同じ問題を話しあうことはよいことだと思う。

田口 私は、車いすで体験に参加した。生徒たちが非常に一生懸命で、子どもたちが「なんだかうまくいかないなあ。」などと言いながら車いすを押して、非常に危険な思いをすることもあったが、とてもいい体験となった。教室で教えることも大切だが、実際にまちに出て体験することが一番いい。私自身車いすを子どもに押しってもらうことは初めてだったが、何回も何回も経験することで子どもたちも覚えていくのではないかと思う。そのためなら私はいくらでも協力したい。

国島 大宮小学校にお伺ひする。先ほど課題として、年間指導計画に沿った活動が出来なかったというお話があったが、1学期、2学期の活動から年間指導計画にそぐわなかったということか。

浅田 時間数を調整したということです。他の教科で時間の組み換えをしながら対応してきました。

国島 当初からねらったものとして、計画していたわけではないということか。

浅田 年間計画や子どもたちの希望をもとに、こういった障害のある方をお呼びしてほしいという希望はあったが、連絡不足のため、うまくいかない部分もあったため、私どもだけで出来る課題から取り組んでいったということです。

国島 このあたりは、今後の課題である。

三浦 私から、意見を交えて発言したい。モデル地区部会の活動自体3年度、3小学校で続けているが、学校のカリキュラムと市のモデル地区事業という関係になってしまっている。本来、モデル地区事業のねらいは『地域の福祉力』の向上、地域のまちづくり、福祉のまちづくりに対する意識啓発であり、子どもたちの学びを大人が共有するといったような発想がそもそもであって、そのために学校が大事な場となっている。皆さんがおっしゃることはもっともであり、子どもたちが学んだことをどれだけ地域や家庭に持ち帰ってもらえるか、子どもたちも学内で学ぶだけでなく、地域で学ぶかということが大切。

今年度は原点に立ち返り、学校のカリキュラムにモデル地区の事業をいかに合わせるかではなく、地域全体をとらえたまちづくり、例えば区民会議が取り組むまちづくり等と連携をとるなど、総合的な取り組みを行いたい。それを子どもたちの目線で検証したり、子どもたちの学びの場に大人が立ちあったりすることで、大人も気づくといったような組み立てになるように準備を進める必要がある。

久世 自治会の地区懇談会、学校の評議員会等でいつも話題になることが、自分たちの地域にどういう障害者がいるのかということ調べてみてもいいのではないかと。そういう人が今どういう生活をして、どういうことで困っているのか、どんな要望があるのか、それは地域ごとにあるのではないかと思う。それを、各自治会長さんに聞いてみる必要があるのではないかと教頭先生とも話していた。それが実現出来なかったことは非常に残念。三浦部会長の言うとおり、地域のことを考えたモデルとするのであれば、中部地区のお住まいの方のことについて調べてみるのもいい。そして、子どもたちがそのなかでどんなことに関心を持つのかということ調べてみるも大切なことだと思う。ぜひ来年の桜木小学校のほうで取り組んでほしい。

三浦 部会にずっと御協力いただいている市社協の大橋さん、事業団の船戸さんにもお話を伺いたい。
大橋 先ほど部会長がおっしゃったとおり、このモデル事業は、小学校の総合的な学習の時間をお借りして、そこにかかわった大人がそのプロセスを共有することによって、それが大人の総合的な学習の時間にもなっていることがポイントで、それによって地域の福祉力が高まっていくことが期待される。その点で言うと、例えば学校の年間計画の他に、もうひとつ、部会として、地域の方々がどのようにかかわっていくかという年間計画があった方がよいと思う。

また、課題を発見してそれを共有化して問題解決の方法を考えていくというのがおそらく総合的な学習の時間の流れだと思うが、それを地域ぐるみで行っていくというのがこのモデル地区事業である。その中でわれわれモデル地区部会の役割は、学校の先生だけでは難しい地域の方々を巻き込んでいくことをお手伝いすることであり、プレーメンの音楽隊のように、授業をやっていくにつれてどんどん巻き込まれていく方が増えていくのが理想的な形であろう。さらに、それが他の地区でもその形が使えることも必要である。

今年度の反省としては、地元の地区社会福祉協議会のかかわりがなかったのが惜しいと思う点と、かかわった大人たちがもう一度集まってどうだったか検証、共有化できる場や仕掛けを作ることの必要性を感じた。

船戸 今回の大宮小を中心とした大宮地区周辺の事業の感想は、学校行事に参加したという感じ。学校側が年間のカリキュラムに基づき進めていたので、児童たちがどんな視点に立っているのかはよく分かった。また、日ごろから福祉関連の仕事をしている私たちでさえ、まち歩きや発表会を通じて子どもの視点に感心させられたり、気づかされたりということがたくさんあった。先ほどもあったとおり、私たちの社会には、いろんな方がいて成り立っているわけだが、その

中の子どもの率直な意見を聞いたことは非常にありがたいこと。また、高砂、仲本、大宮を通じて感じたことは、子どもたちのなかにはあまり地域性がないということ。大人にない視点を持っているという点では、今後の桜木小においてもそうだと思う。

先ほど、うちの地域にはどういう障害のある方がいて、どんな生活をしているか把握することで、何か出来るのではないかというお話が出たが、以前仲本小のときに自治会長さんから同じお話があった。お年寄りと比較的把握しているが、障害者の方について、どんな生活をしているのか分からないと、仲本小でまち歩きをする前の段階でお話されていた。高砂小のときには、私たち自身がそういった視点を持っていなかった。仲本小のときには、当初に思っていた以上には出来なかった。そういうことを大宮小に取り組み前に話しあう必要が部会としてあり、それをつなげられなかったというのが反省点。

特に知的障害のある方とのかかわりについて、うまくテーマに出来なかった。それは部会の課題であり、今までにあげられたテーマ、方向性を大宮小に伝えきれなかったことは非常に残念。学校行事に乗っかることは効果的ではあるが、学校は地域の中にあるということを考えながら桜木小につなげていきたい。大宮小でも、何か続けられることがあれば、地区ごと、年度ごとでかかわるのではなく、進行形という捉え方のもと、地区社協や自治会などに核となっていたき何か続けていけたらと思う。桜木小のときにも、今回参加された方が参加いただくことで、同じ大宮駅を中心としたまちづくりをどうするかといったテーマからつながりが出来る。

三浦 では、次の議題にうつります。

卒業式の準備のため、大宮小学校退席。

2) 高砂、仲本小地区の検証について

事務局 資料2の説明(省略)

三浦 私から少し補足する。私は、現在コムナーレの9階市民活動サポートセンターで働いており、高砂小学校の6年生のユニバーサルデザインに関する学習の訪問を受けた。突然いらしたため、冒頭の挨拶程度しか出来なかったが、4年生のときに、ご一緒させていただいた先生が持ち上がりで担当されており、そのときの学習姿勢が活かされていてうれしかった。

またつい先日、2月22日、23日にサポートセンターで、サポートセンターフェスティバルを開催した。フェスティバルというと華やかだが、障害当事者の団体やその方を支援する団体、さまざまな市民活動の団体の方々が集まり、自分たちの活動の意義、募集しているボランティア、社会に発信したいメッセージなどを伝えるイベントである。23日の日曜日に、そのイベント昨年4年生のときに一緒に体験学習をした仲本小の子どもたちがグループでやってきて、全身障害で24時間介助をうけながらひとり暮らしをしているような方を含め、自助努力をしていらっしゃる方々の話を熱心に聞き入り、もっと世の中にこういったことを伝えていかなければならないと言っていた。確実に前の取り組みが根付いていた。

時間もありますので、来年度、部会としてどのように活動するのについて議論のため、次の議題に移ります。

3) 桜木小学校の展開について

桜木小学校 資料3説明(省略)

三浦 前段階の準備、学校授業カリキュラムに乗らない部分で、地域のどんな人や団体がかかわるかというプログラムを作り、それを実際の桜木小の総合的な学習に反映させていくかという流れを組み立てることが大切であり考えていきたい。

特に早い段階で知的障害のある方にどのようにかかわっていくべきか、私も考えあぐねている部分もあるため、宮部委員にお伺いしたい。

宮部 やはり、障害を体験するとなるとどうしても、白杖やアイマスクといったものが一般的。しかし、学校という枠の中でとらえると、白杖等を利用されている方より、情緒障害や、知的障害等のいる子どもたちのいる特別支援学級のほうが学校にとっては一般的にある光景。同じ学校の中にいる友達としての着眼も必要ではないか。

ちなみに、桜木小のほうに特別支援学級はあるか。

桜木小 はい、ございます。

宮部 同じ学校に通う友達という視点を持つていくことも大切。私が通っていた小学校にも特別支援学級はありましたが、普通に走っていて、普通に遊んでいるのに、なぜ特学なのかと、自分は小学生のときに思っていた。子どもたちはとても素直なのでそういう身近なところから入ると、自分の中に積み上げてくれると思う。

大宮小の方が帰られてしまいましたが、育成会の中でまちあるきの話をしたときに、一緒にまちあるきをした生徒に「特学の生徒との交流はありますか。」と尋ねたところ、ないと言っていたそう。先生、保護者の思う“かかっている”というのと、実際に子どもたちが感じる“かかっている”というのは別次元なのかなと思った。かかわり方、つきあい方を学ぶことは大切。かといって、桜木小学校の子どもたちを教材にするわけにはいかないの、私でフォロー出来ることがあればしていきたい。

三浦 このテーマは、具体的に取り組みにくいけれども、とても大切なテーマだと思っている。3校続けるなかで、宮部委員が発信し続けているところであり、私も形に出来ずにどうしたらいいかと思っている。

宮部 同じ学校の、同じ敷地の中にいるので、触れあっているような感覚があるが、実際にそうなのかといわれると別次元。引き合わせ方は十分な話し合いが必要で、障害のために困難な部分もあるので配慮も必要。人はみんな違って当たり前なことを学んでほしい。

話は変わるが、私は知的障害をもつという言い方がきらい。障害のあるという書き方をしてほしい。

河合 ひとつの例としてお話するが、問題は、学校だけではない。学校と家庭のつながりだと思う。以前、手話サークルに通う若い女性から、はやく手話を覚えるにはどうしたらよいかという相談を受けた。私はそのときに、耳の聞こえない方と友達になるとよいと言った。実際に彼女は、耳の聞こえない女性と交流をもつようになった。彼女は、耳の聞こえない女性に家に遊びにくるようにすすめた。彼女には耳の聞こえない友達しかおらず、耳の聞こえる友達は初めてだったので、うれしかったと思う。ところが、彼女が家に行くと、家族が何も知らず、対応が冷たかった。彼女は、はじめて社会への道が通じたと胸を張っていたのに、家族からの冷たい扱いを受け、とても傷ついた。やはり自分は社会から阻害されているのだと思ってしまった。私は

手話を学ぶ女性に、なぜ家族に耳の聞こえない人の問題を伝えてくれなかったのかと言った。これからの社会は、学校で教えるだけではなく、家庭・地域にどうつなぐのかが大切であり、今のところ学校から家庭に問題をつなぐルートが出来ていない。

船戸

私自身が小学生、中学生だった当時、当時は複式学級と言ったが、そのクラスとの交流ははっきりいってなかった。その後、地域で生活していて彼らに会ったかというところも少ない。つまり、地域の中で一緒に生活していたかというところ、そうではないということ。学校に地域の方などを呼ぶことができるのか、子どもたちが地域に出て行くことができるのかという方法論は分からない。ただそのときに、みんなが同じ体験をするのではなく、友達になっているが、実は友達になっていないのではないかと考えることを考え、交流をはかるグループがあってもいいと思う。ただし、これは実験ではないので、子どもたちの思いを考えながらでなくてはならない。学校には、子どもたちや PTA の方よりも、質的にもっと広がるようなイメージを持って活動していただけたらと思う。学校のなかのクラス単位ということではなく、クラスを越えたグループ編成をしていただけてもまた違ってくると思う。

学校行事として行われる総合学習に早い時期から地域の方、今まで関係をもったことのないような方に参加していただくことが大切で、アイマスクや白杖の体験のときに、近所の床屋さん等にも声をかけて参加してもらうなどして、お互いを理解し合う関係づくりのきっかけをつくり、その中に地域で生活している障害者や高齢者の方にも参加していただけたらいいと思う。非常に盛りだくさんになってしまってしまうが、これまでの3校の経験を活かし、今までの踏襲ではなく、次に発信できるような、企画が出来たらと思う。

部会のかかわり方としては、学校の授業が9月から始まるから、その少し前に集まるというのではなく、その前から大人たちだけで集まる必要がある。そのときに子どもの実行委員などにも入っていただけたらいいと思う。河合委員もおっしゃっていたとおり、一緒にいないと分からないことはたくさんある。だからまずお互いを知り、1月までに何らかの継続的なかかわりを持つことを大切にしたい。

宮部

子どもの年齢、発達状況にもよるが、特別支援学級の生徒も無理のない範囲で参加して、一緒に勉強する仲間としてかかわることが大切だと思う。参加するとしたら配慮が必要。参加の形としては少人数がいい。障害のある子どもをひとりぼっちにさせないというのが日ごろからの私の主張だが、同じ学校の中にも、何か外されているかなというのがどうしてもある。知的に障害のある子も結構いて、いろんな意味で一緒に勉強している仲間なのだというのを感じてほしい。

山崎

私も大宮小学校出身で、私がいた当時は、やはり複式学級との交流はなかった。先ほど、大宮小学校の生徒が「交流がない。」と言っていたが、基本的に学習についてこられる生徒は普通学級に配属されている、そういった意味では大宮小学校は一歩進んだ形。もちろん発達状況等の関係で支障が出てきてしまう場合、特別支援学級での学習となるが、本人の状態、親御さんの希望、個人個人をみて普通学級のほうに入ってもらっている。おそらく子どもたちは、普段からあの子は障害を持っているという気持ちを持たないように育ててられているため、特殊な目で見えていないのだと思う。私たちがいたころとは状況がちがうことはご理解いただきたい。大宮小学校のほうで一番悩んでいたのは、まちあるき時期が遅くかなり寒くなってしまったこと。まちあるきの時期をもっと早めると良いのかもかもしれない。発表会については、学校公開日にあわせて行うことで、親御さんへのお知らせが出来た。部会でねったものをはやく学校に渡

してあげてほしい。そのほうが学校側としてもやりやすいと思う。

三浦 今までのご意見をふまえて、前向きにやっていきたい。実質的に20年度は立ち上がりも遅く、この場での十分な話し合いが出来なかった。このことは部会長としても反省する。事務局にも共有していただきたい。ひとつ確認するが、久世委員と山崎委員は21年度も大宮の代表として参加いただけるのか。

山崎 私のほうは、ちょうどPTA 連合会のほうは理事の交替となりますので。

三浦 地域のかかわりをどのように組んでいくかが課題。地区社協等の参加については年度当初に仕組みを作ることで、出来る限り桜木小学校の負担とならないようにしたい。大宮区民会議の方々やコミュニティー会議の方々も巻き込んでいけたらと思う。モデル地区部会の組織は出来上がっているの、多少皆さんにはご負担をかけることにはなるが、実際にまちに成果のあるような活動をしていきたい。

実際に出来るか、出来ないかは別として、先ほど子どもたちの代表が参加してもいいのではというお話もあったように、桜木小のご理解と御協力をいただけるのであれば、部会を土曜日に開催する等もしてみたい。また、特別支援学級の話も出たが、桜木小学校の特別支援学級に通うお子さんの親御さんに育成会を通じて意向をうかがっていただくことも検討したい。

今後については、こちらから学校側に提案をし、出来ることと出来ないことの線引きをしていただく形をとりたい。出来ないことについては、学校の外で、モデル地区部会が主催で何かやることもあっていい。来年度は全国生涯学習フェスティバルの実施で、埼玉県、さいたま市は特に生涯学習に力を入れる年であり、時期もちょうど10月から11月頃くらいなので、直接関係があるわけではないが、その時期に地域の福祉力を上げるというのも、生涯学習にぴったりだと思う。21年度は部会として主体的に動いていきたい。私自身もそのためなら協力していきたい。

それから、突然のご提案ではあるが、部会として報告書を作りたい。モデル地区事業には、モデル地区という活動を通じて地域のなかにモデルを展開することで、さいたま市全体の福祉のまちづくりへの理解、啓発を図るという位置づけがあったわけだが、それがきちんとした形に残らず、参加した人だけの記憶に残っているだけでは意味がなく、記録に残していかなければならない。

久世 桜木小学校は、21年度のモデル地区の指定校になるのか。

事務局 そもそもこのモデル地区事業は、交通バリアフリー基本構想の重点整備地区に指定されている浦和駅周辺、北浦和駅周辺、大宮駅周辺の地区の小学校にお声がけをしている。

久世 指定校としたほうがいい。学校として取り組み、その中で5年生に部会と連携してもらおうというほうが学校として取り組みやすいと思う。

また、部会長にお伺いしたい。モデル地区事業の目的は、子どもたちに福祉について理解してもらうことか。

三浦 はい。ただし、それだけではありません。

久世 学校では、子どもたちに福祉って何だろうという問いかけを1学期間やって、地域のいろんな方たちから話をきいて、さあ2学期やってみようという形にしたほうがいい。

中部地区の社会福祉協議会のフェアというものがあり、その際に私は10台ほど車いすを借りようとした。そうしたら、危ないし、指導者がいないのでだめだと言われた。本来、そういう学習、そういう場こそ大切で、そういうことを子どもに教えられたらいい。それをこのプログ

ラムを通じてやっていくことで、地域の福祉力が上がっていくと思う。中部地区の社会福祉協議会では、一人暮らしのお年寄り向けに配食サービスや月1回の会食を行っているが、その配膳を手伝うこともひとつの福祉サービスであり、それに参加してもらうこともいいと思う。

三浦 20年度の議論不足の反省を活かして、やれることをやっていきたい。
それでは事務局に戻します。

事務局 次回の部会の予定は6月ごろでよろしいでしょうか。

三浦 もっと早くてもいいと思います。

事務局 では、人事等が済み、体制が整いましたらということで。以上をもちまして閉会とさせていただきます。

3 閉会

事務局 長時間にわたり活発なご議論ありがとうございました。

以上